

東京多摩地区現代俳句協会

# 多摩のあけぼの

会報 No.145

多摩風土記（小金井公園砲）

小金井公園に青銅砲がある。この砲は明治4年から昭和4年5月まで、皇居内本丸跡で、正午を知らせる空砲が射られていた。案内板には『午砲』による正午の通報は、今の東京都区部の大部分に聞こえ、その音から（ドン）と呼ばれて人々に親しまれた」とある。水戸製とされて来たが、関口大砲製作所か川口の鑄物職人作との説が出ている。（健介）



## 近くて違う俳句と短歌

今野寿美（歌人）

俳句の十七音と短歌の三十一音。短詩型文芸として近い関係にある両者も、本質的な違いは案外小さくないのだろう。七七がある分、短歌は語りの容量をもつ。それが無い俳句は象徴的に、提示して読者の心に響くものでなければならぬ。それだけ俳句はより高度な表現を求められるといえそう。

『古今集』のおもしろさに惹かれて、わたしは学生時代に短歌実作を始めた。短くまとめて一首完結というスタイルが楽しくて熱中しながら、そのつながりで俳句を読む機会もふえた。切り詰めたことばによってむだなく述べるにはどうしたらよいか。それを考えるには、より小さい俳句に接することが、違い

はありながら何より具体的で、ことごとく胸に落ちた。

どんな俳句に目をとめるか。最近の体験をふまえて述べてみたい。二年ほど前であったか、黒田杏子さんから『石牟礼道子全句集泣きなが原』（平成二十七年五月・藤原書店）をいただいた。石牟礼道子が俳句を詠む作家であることも恥ずかしなから知らなかったため、軽い驚きを覚えながら手にとってみると、帯にも記されている一句に胸を衝かれる気がした。

### 祈るべき天とおもえど天の病む

石牟礼道子『天』

石牟礼道子は熊本県水俣市周辺で発生した水俣病をいち早く社会問題として究明し、訴える活動を始めた人である。『苦海浄土——わが水俣病』（昭和四十四年一月）は大きな反響を呼んだが、その活動、著作のままに、日本の高度成長期に企業の犠牲となった人びとを救いたい一心で奔走する人の世界観が、この一句十七音のなかに凝縮されている。すでに、天こそが病んでいて祈りも届きそうにないという絶望感をいきなり言い放った迫力。大げさでなく釘付けになってしまった。

悲嘆しているとはいえ、それでも祈る。自分は病む人びとの

ために尽くす、という意志がこもり、そんな気骨に満ちてもいい。おそらくそこに安らぎを得ることもできるはずである。

これは石牟礼の初の俳句であったという。すでに社会派の作家としてめざましい活動をつづけていた石牟礼にとつて、偶然生まれた句であったという。端的に鋭く意志なり心なりを伝える得る俳句の特質に目覚めたかのように、以降、石牟礼はおりおりに俳句を詠むようになる。石牟礼自身この句には思い入れも深かったようで、やがて石牟礼道子俳句の代表作として定着し、それだけの意味も価値も魅力も備えた句である。

もう一句あげておきたい。

### 雑巾になつても木綿もめんにある力

久保信一一九五五

(阿部正子編『訴歌』そか 令和三年四月・皓星社)

「訴歌」はこの本を刊行するに当たつて新たに生まれた造語だという。全国の隔離施設に入所していたハンセン病の患者さんたちのアンソロジーである。「ハンセン病文学」という位置づけがされているとおり、日本には優れた文学作品が数多く残されていて、詩歌もその一大領域なのだった。「ハンセン病文学全集」(平成二十二年・皓星社)に収められた詩歌から、テーマ別に短歌・俳句・川柳を選び、新たに構成したのが『訴歌』である。読むと、すさまじい病の現実、苛酷な施設内の暮らしなどがつづさに描かれていて、衝撃を覚えるほどであった。

右にあげた句のテーマは「どん底」。作者名の下の西暦は作品が生まれた年である。それ以外の情報は一切ない。ただ、作者の境遇を抜きにしても感動を呼ぶ作品だと思ふ。痛ましい思

いに暗澹としながら、特に忘れがたく思う句であった。

自分の人生を雑巾にたとえて自嘲する。虐げられているという訴えである。雑巾といえは、浴衣↓寝間着↓おむつ↓雑巾というように、物のなれの果ての姿といえるから、どん底の意味を体現する哀れなものの象徴だ。しかしそれにも「力」が備わっていると昂然と顔をあげる。それこそ真実ではなからうか。雑巾には木綿が何よりよい。汚れを、穢れをぬぐい去る心づよい物でもある。この逆転の価値観。そこに真実もある。胸がすくほど小気味よい。そう思った。

こんなふうに俳句に刺激される体験。それは歌を詠むようになった学生時代から変わっていない。俳句のことばの喚起力に意欲をかきたてられるのだった。結婚したら相手の書棚にかなりの数の歌集にまじり句集も数多くあった。全句集の大部なものも並んでいた。都立高校の教員をつづけていたが、家にいるときは何よりそれらの本を開くのが楽しみだった。「西東三鬼全句集」に夢中になつて新興俳句の面白さを知り、『三橋鷹女全句集』に惚れ込んで戦前からの女流俳句の躍進の姿を学んだ。一句一句味わいながら、創作の領域で存分に遊ぶことができた。平たくいうと目をとめた俳句が刺激になつて歌の想を得るということも多く、それが嬉しかった。

### この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉

三橋鷹女『魚の鱗』

樹の上には別の世界がある。別の人格、別の存在に成り代わる。変身を可能とする。鷹女の凄みが圧倒的な句である。女として生まれ、生きる切なさも吐露している鷹女だが、樹に登る

夢想によって現状打開を志しているのだろうか。では、自分はどうなのだろう。鷹女よりはるかに自由に恵まれているはずの今の時代のわたしたちは……、と思ひめぐらせる。

負けたくはなしなければも樹に登りこの世見おろしたるこ

ともなし

今野寿美『星刈り』

自力で高いところにゆき、上から見おろすといえは文句なしに優位に立つことだ。自分にも負けたくない意地はある。人生なべて競争だし、創作だって評価を競う。認められたいとも望む。でも、樹に登る、上に立つなんてこと、わたしにはないな——。正直にいえばそんな意味であるから、この歌、同性からはフェミニズム（女性解放思想）の観点から、なぜ樹に登らないのかと責められた。鬼女になるどころではなかった。鷹女の名句に刺激されたところで、やはり根が小心者なのだろう。昭和が六十年代に入った頃。女性たちがにわかになんか元気づいていた。わたしは三十代のはじめだった。

厳密なルールによる本歌取りの手法というより、刺激されるままに自分の心をそこに添わせるうちに自分なりの新たな一首のイメージがたちあがるといような歌の生まれ方であった。同じことばを使って同じ趣旨の作に焼き直すようなことをするわけにはゆかない。限られたことばの喚起力に乗って、別の枠別の表現空間を得る。そこにはささやかな手応えがあった。

だしぬけに咲かねばならぬ曼珠沙華

後藤夜半『底紅』

曼珠沙華は全くそのとおりの咲きっぷりだが、「咲かねばならぬ」と受けることで人間社会のやばな義務感に重なって揶揄

しているとも読めて、人生観を匂わせているようでもある。

夏ゆけばいつさい棄てよ忘れよといきなり花になる曼珠沙

華

今野寿美『若夏記』

こんな親しみ方だから、俳句と短歌で個人的に結びつけたくなることも少なくない。

風いかのほりなにもて死なむあがるべし

中村苑子『水妖詞館』

われわれ人類、何を以て命を賭けるというほどに打ち込めるか。ただもう、あがれるだけあがるだけだ、とでもいうかのよ

うな風いかのほりよ。一途さよ。一途になるほかない。このわたしも。

風いかのほりと記しゆき天なるもののかたちさびしき

山中智恵子『青草』

中村苑子の句と同時代の作だが、おそらく直接の関係はない。個人的に並べて感じ入っているだけである。同じ部首の漢字三つはみな天をゆくものだ。上昇していつてつきつめるかのように。それだけ屹立して孤独ともいえる。そこに苑子の句を思い合わせたのだったかもしれない。

この一首は山中智恵子が畏敬した思想家で歌人の村上一郎への挽歌では？という説があった。村上の墓碑には、ただ一字「風」と彫られているという話であった。挽歌として読むと、限りなく透明に抜けてゆくような、人間の孤のかたちが目に浮かびそうに思える。優れて魅力的な短歌と思う。

こうして、併せて並べて記憶している俳句があることに、わたしはほのほの満ち足りた気分になるのである。

# あけぼの集

日暮れまで勤しむ農夫返り花 八王子 青木 隆  
 晩年のこころ癒やすか冬ぬくし 東久留米 青村 萌生  
 巨人らに踏まれて軽し春の雲 八王子 赤野 四羽  
 ミニ熊手買うて夜道のあたたかし 国分寺 秋山ふみ子  
 多数派は饒舌派なり冬星座多 摩 足立喜美子  
 末枯の大樹の窪の仄温し小 平安達 昌代  
 街の灯が届かぬ処冬の月清 瀬穴原 達治  
 あちこちに監視カメラや虎落笛 稲 城新井 温子  
 歩を延ばし知らぬ小径の冬ざくら 八王子 荒川勢津子  
 寒き夜や神話に燦けるポセイドン 町 田有坂 花野  
 寒茜ひとり芝居の男あり 国分寺 安西 篤  
 長き夜や活字をひろうルーペかな 足立 飯田 和子  
 一輪草使い切れない自由時間 東久留米 飯田 玉記  
 仲居さんの通う月夜のワンタン屋多 摩 石川 春兔  
 大銀杏よる辺なき身へと霏霏小 平石橋いろり  
 高架ゆく電車すっぽり冬夕陽 練馬 石原 俊彦  
 すべらかに賓頭盧尊者吾が罪も 八王子 市川 春蘭  
 花芒風の自在を諾えり 青梅 一ノ瀬順子  
 空也念仏襟を正して消えるなり 狛江 伊東 類

不審者は大方手ぶら神の旅町 田 稲吉 豊  
 泥鰯屋は壁に掛けたり大熊手町 田 今田 述  
 路地裏に子らを集めてコマ廻し町 田 宇賀いせを  
 小春日のバスはダンゴでやつて来る 武蔵野内田 牧人  
 人形の口に紅さす小春かな 国分寺 越前 春生  
 遠くまで行けさうけふの冬青空 武蔵野 江中 真弓  
 雪椿道元の書は「空」とのみ 府中 大井 恒行  
 秋深し昭和レトロの息遣い 八王子 大谷みどり  
 花屋には花がいっぱい日記買う日 野 大槻 正茂  
 ピンポンパ文字をさがして冷えた指立 川 大友 恭子  
 冬の空昨日脱ぎ捨て高く高く 川 崎 大西 恵  
 手を繋ぎ歩む時間や花八ツ手三 鷹 大森 敦夫  
 国葬や今年の菊の堅 薔 昭 島 岡崎たかね  
 そぞろ生き散りぎわ思案冬紅葉 武蔵野 岡崎 万寿  
 深紅なる名残りのカンナ天の瘡三 鷹 小川 葉子  
 秋冷や吾が老猫の寄り添ひつ 飯塚 奥野 亜美  
 稽田の谷間にひとり深呼吸 川崎 尾崎 太郎  
 冬ざれや寄せては返す葉音の夜 昭島 尾関 英正  
 落葉蹴るいつも棘ある誉め言葉 稲城 門野ミキ子

あけぼの集

遺されしものつなぎゆく光る川西東京金谷サダ子  
 赤きセーター着て後衛に甘んずる日野亀津ひのとり  
 山紅葉老いの身に受くレジリエンス西東京河 順子  
 秋海棠永遠に続かん老と生立川川島 一夫  
 昭和のきみの虫籠忌とわに待つ大田川名つぎお  
 水雨中一人家出の土手無人調布菅 さだを  
 望郷をただ搔き回し葛湯溶く清瀬神崎 幸子  
 ひととせを生きる眉引く初鏡小平城内 明子  
 信長も赤銅の月恐れしや町田菊池美智枝  
 明日への希望はさやか力溜め武蔵野高坂 栄子  
 時雨るるや古いドラマに肩パット西東京幸村 睦子  
 芒原祈るときには石を積む府中小林 育子  
 一の酉デニムの襟を立てて行く町田小山 健介  
 南極のオンホールよ無名の大河よ立川今野 修三  
 素うどんに七味たつぷり敬老日多摩斉田 仁  
 猫砂を新聞に替へ漱石忌昭島坂本 空  
 扇風機気怠く昭和の首を振る八王子櫻本 愚草  
 胡桃割る信ずる未来あるやなし東久留米佐々木克子  
 解らない句が高点の初句会府中笹木 弘

戦火いま雪積む闇を粘菌めき調布佐藤 菜  
 もみづるや芙美子の母の大座布団昭島佐藤 光子  
 風花に北前船の帆の撓たみ八王子柴 れいこ  
 月今宵ねむりは小さき死と思う杉並島 彩可  
 ボジョレヌーボ解禁日幹事から難病治療中国分寺島田 澄子  
 花手水終えしお膳の菊なます足利清水 弘一  
 秋燕忌書舗失せ街は乾びたり小平下田 峰雄  
 凧やうそにはうそをぬりあげる調布白戸 麻奈  
 博物館の木乃伊と語る文化の日世田谷鈴木 浮葉  
 星月夜戦に喘ぐ民がいる立川鈴木かずえ  
 銀座は秋パート巡る亡き母と小平鈴木 寿江  
 車中はわたしと枯葉霊園行小金井鈴木 佑子  
 心房がビブラートして顔に霜町田栖村 舞  
 宿坊にひと日の縁放生会板橋諏訪部典子  
 風に舞いカサコソ語る枯葉かな東村山瀬尾 恵澄  
 裏紙に一句生まれる神無月小平関 梓  
 冬かもめ文庫本より軽い旅調布芹沢 愛子  
 冬の虹スキップ一步荷を下ろし小平高瀬多佳子  
 白詰草白し出番を待つ兵器武蔵野高野 公一

あけぼの集

寒鰯や能登の真塩で焼き上げる 西東京 高原 桐  
 もう一度犬飼ふ話小六月清 瀬谷村 鯛夢  
 信濃路に父母が二人で着ぶくれる 国分寺 玉井 豊  
 落ちゆく陽晒柿ざれがきに染む近江の地 稲 城 玉木 康博  
 三日月や補聴器に枯葦の声 日 野 玉木 祐  
 立冬や母の窓辺の雲厚し 三 鷹 田山 光起  
 歲月の中に母の死草の花 武蔵野 津久井 紀代  
 父送る葬殮の胸刃置く 八王子 辻 升人  
 北富士を目指す爆音村時雨 八王子 都筑 遊  
 晩秋の至仏を仰ぐ 村境 東村山 寺尾 令子  
 臘月や予は昼寝とて逝かれたる 立 川 遠山 陽子  
 酔い覚めの空気が旨い今朝の冬 西東京 戸川 晟  
 赤のまま今なら分かる母のこと 杉 並 飛永 百合子  
 車椅子順路に低き返り花清 瀬 永井 潮  
 日溜りの花舗に群れとぶ冬の蝶 町 田 長澤 義雄  
 一家離散庭に綿虫舞うばかり 小 平 中條 啓子  
 月の兎月面利用聞いて無い 西東京 中田とも子  
 カテドラル冬日届かぬ懺悔室 国 立 中野 淑子  
 ペチカの灯奥の棚から惚れ薬 府 中 中矢 温

秋扇静かに閉じて 囲碁終る 座 間 長野 保代  
 縄文の森の賑はひ 冬支度 武蔵野 夏目 重美  
 しがらみを捨つれば 軽し年の暮 町 田 成戸 寿彦  
 離陸して街はきらめく 大聖樹 国分寺 南行ひかる  
 古本のパラフィン紙ざらり 冬の月 東久留米 西野 奏子  
 秋天の富士整然と翼の上 世田谷 西前 千恵  
 御殿山色鳥散りて いたりけり 昭 島 西村 智治  
 領いてくれた芒を抱き寄せる 多 摩 拔山 裕子  
 秋深む 裸電球 旧 農家 三 鷹 根岸 敏三  
 おでん煮る皆既月 食すすむ間を 三 鷹 根岸 操  
 紅葉に階調人に 多様性 小 平 野口 佐稔  
 親不孝お軽に声か 村芝居 八王子 野澤 勝美  
 駄作とは知りつつそつと 初句会 武蔵野 蓮見 順子  
 春の音作り始める 川目 覚め 武蔵野 蓮見 徳郎  
 昔脚半湯今は 足湯の年の暮 羽 村 花貫 寥  
 ゆつくりと吹かるる 烏瓜の午後 多 摩 平山 道子  
 紅葉して中世を呼ぶ 花水木 八王子 広井 和之  
 すすき原母捜すこゑ 風になり 調 布 藤原はる美  
 部屋ひとつの母訪ぬれば 蜜柑ひとつ 練 馬 淵田 芥門

あけぼの集

大根の抜き穴すぐに風小僧八王子冬木 喬  
 年下の父が手を振る初景色 羽 村堀部 節子  
 仏の座けむりのように歩きたし 国 立前田 弘  
 たまに來る息子に諭され月仰ぐ 国 立前田 光枝  
 冬ざくらとんと見かけぬ伸子張り 木更津 松本 まり  
 紅葉且つ散る未練などありません 八王子 松元 峯子  
 うたかたの恋に終らず冬の恋 東久留米 三池 泉  
 銀杏散る外苑闊歩すラガーマン 東久留米 三池しみず  
 我を知る 楓の古木秋深む 東久留米 三浦 禎三  
 空つ風帰路の屋台で爛二合 小金井 三浦 土火  
 淋しさと柿の丸みを大切に 世田谷 三浦 文子  
 二十世紀梨齧って私の立ち位置 町 田 三木 冬子  
 核はない半径五キロ冬うらら 国分寺 水落 清子  
 むらぎもの心急くけふ枯野 駆く 三 鷹 水野 星間  
 火星 赫々 兵戟の果て ず 秋 日 野 満田 光生  
 牡丹雪じつと見ている 十五分 昭 鳥 宮腰 秀子  
 雪の夜は耳にじょうずに触れてくる 調 布 宮崎 斗士  
 初時雨死んだ友らの声を聴く 国分寺 武藤 幹  
 柘や葉隠れに咲く花いと し 小金井 村井 一枝

半生を周回遅れ冬に入る 熱 海 望月 哲土  
 踝を落葉に埋めつ逢いに行く 東村山 森本由美子  
 目覚めては光を食べる 霜柱 三 鷹 守谷 茂泰  
 石路の黄にこころあずけている 眞昼 町 田 山崎せつ子  
 長月や日毎に歩幅狭くなる 東村山 山崎美紗緒  
 初夢や観音後光の桃色 ぞ 府 中 山本 徳子  
 冬に入る 一葉一葉に違う 風 八王子 山本ひまわり  
 冬夜 会 話 まとまり 祝 酒 多 摩 山本みつし  
 初雪や白き帽子の松の枝 調 布 豊 宣光  
 冬薔薇がまつ赤ダンスはチャチャチャ 稲 城 好井 由江  
 冬桜横顔ばかりがまなうらに 三 鷹 吉川 真実  
 骨あげやなほ医学書の炎立つ 冬 府 中 吉澤 利枝  
 散り紅葉ママもよちよち後ろより 東大和 吉田雄飛子  
 新蕎麦や透明パネルに独り言 東久留米 吉平たもつ  
 桐一葉ふはりと世事を忘れをり 国 立 吉村春風子  
 御陀仏の先に成仏柿を干す 日 野 依田しづ子  
 凧やひとりぼつちの大都会 町 田 米倉 信山  
 ポインセチア育て誕生日のケーキ 立 川 米澤 久子  
 大方は妻の言いなり 冬 籠 青 梅 渡部 洋一

青木 一郎

丸刈りになつて街路樹夏終る

米澤 久子

「丸刈りになつて」の出だしでドキッとさせられた。妻と車で買物に出かけて行くとき、街路樹のある道を何か所か通る。日毎に花水木、銀杏、ケヤキの街路樹の葉が落ちていく光景を見ながら二人で話し合ひ、夏が終りに近づいていることを知る。

青村 萌生

もういいかもっと生きるか半夏生

三浦 土火

齢を重ねるとこの句の様に自問自答を繰り返したくなるが、一方では人の一生というものは重い荷物を背負つて長い道のりとほとほと歩いてゆく。ただ生きるそれ丈で充分に値打ちがある。半夏生という季語は即かず離れず適切な選択と評価出来る。

安達 昌代

檸檬噛んで見えざるものに身構える

山崎美紗緒

人の不安は様々な仮想敵を生み出す。現在の世界情勢はもちろん、最も向き合ひ難い自らの内面に対しても、掲句は果敢に挑戦するかのようだ。「檸檬」の爽やかさが、その真摯な姿勢をよく象徴していると云えるだろう。

有坂 花野

魔女だった頃は黒髪天の川

佐藤 茉

魔女なら天の川も箒にまたがりひとつとび。誰にでも魔性は潜んでいるように思う。娘が幼い頃友達ちと喧嘩していた。うちのママは魔女なんですかね！うちなんか教育魔女なんですからね！と。白髪の魔女もいそうだが作者はもう魔女ではないらしい。

飯田 玉記

もういいかもっと生きるか半夏生

三浦 土火

最近大病を告げられ、充分生きた、もういい、そんな気分だった。作者も似たようなことがあったのかと勝手に思ったが、中七には諦めず生き抜こうとの強さも感じた。夏至の頃、葉の半分が白色になるこの季語とのバランスも素晴らしいと思いました。

飯田 六斗

うちの子となりし蠅螂泣くしぐさ

足立喜美子

蛸蟪を何匹も飼つて居る女性俳人を思い出した。掲句も女性作品、うちの子というぐらゐ蠅螂が好き、生きものへの慈愛、この裏側に見えてくる喜美子さんの優しさ、訪れた蠅螂も安堵したことだろう。下五を仮名で「しぐさ」、これも魅力だ。

石川 春兎

うちの子となりし蠅螂泣くしぐさ

足立喜美子

洗濯物を干している時に庭で見かけた蠅螂が、洗濯物を取り込む夕方になつてもまだそこにいた。もう「うちの子」だ。鎌を顔の前で動かす様子が、人形浄瑠璃の一泣くしぐさ。そのもの。蠅螂の動きがはつきりと見えてきて、楽しい句である。

宇賀いせを

迎え火を焚く夕やみに家族の輪

鈴木かずえ

夏の夕方、祖父や亡き人々の面影を偲んで、残された家族全員縁側に出て迎え火を焚く。「今、仲良く暮らしていますよ」「末の子は今年、一年生ですよ」と家族の現況を天国の家族に知らせる輪。

内田 牧人

城一つ釣瓶落しに呑み込まる

渡部 洋一

俳句は説明報告を避ける為に修辭するが、過ぎると読者は句意が想像出来ない。掲句は如何！夕日の中に古城の姿が見えたが秋落暉と共に消え失せた。そうか幻影だったのだ。戦国時代の歴史が甦る、北条氏の落城では？想像を拡げられて楽しかった。

江中 真弓  
蜘蛛の糸人差し指が触れたがる  
飛永百合子

不快な蜘蛛の糸だが、雫や日や月の光を宿すと、緻密に編まれた巣は美しい。殺生の行われるこの妖しい糸に触れたいけれど触れられない、そんな微妙な気持の感覚に納得、共感する。生き物の懸命な営みを壊してはならない。「人差し指」が生々しい。

岡崎 万寿

ひもしさの歴史を綴る芋の蔓

永井 潮

戦後の一時期、食糧難で私も芋蔓を食べた。調理に母が苦労していたようだ。「ひもしさの歴史」とは言い得て妙。綴り方か日記に書いていたのだろう。今回ウクライナ戦争で、飢餓が世界各地で広がっている。戦争と飢え——いつまで続くぬかるみぞ。

小川 葉子

ヘップバーンのトレビの泉幾度見し

今田 述

新宿タカシマヤのテアトルタイムズスクエアの大音量と巨大画面。『ローマの休日』のアン王女は今にも飛び出しそうだった。掲句の作者が見ていたのはスクリーンではなく、本物の泉。隣には愛妻。惜別の若き日、テアトルタイムズスクエア。

川島 一夫

暗号のように向日葵折れている

三浦 文子

風か、事故か、それとも故意か。向日葵が折れている。朝起きてのことだろう。その時、作者は思ったのである。ウクライナのことを。向日葵はウクライナの国花である。「暗号のように」ウクライナの現実を象徴している。

川名つぎお

持時間なき夕焼に見つめらる

安西 篤

夕焼の美しさは厭きないが、歳月は深く永い。持時間なき夕焼、とは実景と作者との相對關係によつて成立。句構造を十二分に活用した表現の心的状態は、充分に向き合った長い層と時間の行方が相互に自覚を求める。明日の健闘を称えあう一景だ。

高坂 栄子

うちの子となりし螻蛄泣くしぐさ

足立喜美子

一読しほんわかとなり笑みがこぼれた。庭にまぎれこんだのか、それとも外で捕まえたのか判らないが「うちの子となりし」と歓迎している様子。鎌状の前脚の動きを見てきつと嬉し泣きかなと想像している作者。俳諧味のある一句である。

幸村 睦子

夕ひぐらしかくれんぼの子みな消えて

中條 啓子

一読なつかしい景色が胸に広がってききました。夕方になると、子供達を呼ぶ「ごはんだよー」の聲が聞こえてきます。昔々にタイムスリップしてしまいました。コロナでギスギスした毎日をほっこりさせてくれた句でした。

芥田 仁

吾が胸の血の一滴やアンタレス

鈴木 浮葉

蠍座の首星アンタレスは、夏の宵に南天に赤く輝く。私の生まれた上州では、ノアカボシとか、ホーネンボシと呼んでいた。今でもこの星を見ると、当時の野望や挫折を懐かしく思い出す。「血の一滴」の想いの深さに共感する。

坂本 空

歩かねば脚は廃用夏落葉

荒川勢津子

在宅テレワークが進み、通勤で歩くこともなくなつた生活となり、まったく他人事とは言えなくなつた。このままでは、歩けなくなる日も早まるのではないか。夏落葉が象徴的で、早おかつ、歩くときの実感を伝えている。

櫻本 愚草

オデーサを発つ貨物船古小麦

岡崎たかね

ロシアの、ウクライナからの穀物など食糧輸出の合意に復帰するとの発表を見た。古小麦であろうと飢えた者にとっては美食である。第二次大戦後には大量の余剰小麦の処理が大問題になっていた。余剰農産物の処理についての俳句で平和を論ずるとは。

笹木 弘

蛇泳ぐ時代おくれにならぬよう

佐々木克子

池面を泳ぐ蛇を何度か見たことがあるが、何かに追われているかのように、必死に泳ぐ姿が浮かぶ。身を左右に大きく振りながら、水面を滑るように進む。中七の「時代おくれに」が、蛇の景に合わせ、自分のことも含まれているようで面白い。

佐藤 光子

うちの子となりし螭螂泣くしぐさ

足立喜美子

庭先の葉に螭螂を見つけた。手を差し出すと、本能で鎌を振りまわす。「うちの子になろうね」とテールにそっと置く。安堵したのか、折れそうな腕を左右に動かす。「うちの子となりし」に、作者の小さな命への温かな目差を感じた。

柴 れいこ

大仏に会いに出かける秋裕

蓮見 徳郎

奈良の大仏は聖武天皇が早世した皇太子の為、また後の万物の幸福を願い造立した由。現代のコ罗纳禍、ウクライナ問題も早く鎮めてほしい。この句は秋裕をきりつと着て大仏に会いに行く。気合と女心が美しく表現されていてとても心に残りました。

島 彩可

跳躍の頂点しづか青嵐

安達 昌代

一読、美しい跳躍のスローモーションを彷彿させる。その頂点が「しづか」だと捉える作者の心眼に感服。どんな事柄もその極みにはしんとした一瞬があるのかもしれない。「青嵐」の動と「頂点」の静のコントラストも鮮やか。

清水万ゆ子

草虱つけて足から老いてゆく

城内 明子

朝早く広い草原をよく散歩する。本当に気持がいい。里芋の大きな葉に光る露の玉が美しく転がっている。よく新聞広告やテレビのCMに、自分の足で何時までも歩きましよう、という。杖はまだ持たない。自分の足を愛おしむ一句になっている。

白戸 麻奈

吾が胸の血の一滴やアンタレス

鈴木 浮葉

「アンタレス」は地球から180光年かなたにある赤色巨星である。その星を「血の一滴」と表現している。しかも「吾が胸」としている。私はこの俳句に、苛烈なロマンスシズムを感じている。

鈴木 佑子

ど忘れの頭をたたく秋扇

成戸 寿彦

ど忘れの多い私はど忘れのたびにおちこんでいた。掲句を読んだ時思わず笑ってしまった。芝居に出てくる暫間のように頭を叩いて明るく軽くなる行けば、これでもいいんだと。下五の秋扇で寂しさと老いを感じさせるシヤレた一句だ。

栖村 舞

魔女だった頃は黒髪天の川

佐藤 菜

「ジョニーが来たなら伝えてよ」と言つてワタシが去ったのは五十年前。アイツはついに来なかった。豊かだったワタシの黒髪は今じゃトーモロコシのヒゲみたい。それでも待ってるよジョニージーサン、ワタシはダイジョウブ。

谷村 鯛夢

夏果てる西瓜もうなぎも喰はぬ間に

穴原 達治

目には青葉、の山口素堂大先生も裸足で逃げ出すような豪快な一句。こういうのを季語が三つだとか、季重なりだといつてもつまらない。とはいえ、こいうのが流行るのも困ったものですが、個人的には大好物。俳諧は言葉の芸だと再確認しました。

辻 升人

トマト切る鋭き言葉研ぐように

高坂 栄子

この句の芯はやはり「鋭き言葉」であろう。自戒の言葉と採るか、相方の言葉と採るかで趣も違ってくる。自戒の句だと説明に終ってしまうので、この際相方の言葉ととらえた場合どうだろうか？昨日あんな事を言われたけれど、優しく研いでみた。と。

都筑 遊

魔女だった頃は黒髪天の川

佐藤 実

魔女の家に生まれた女の子は、13歳になると修行のために家を出るといふ。箒にまたがった彼女は、どんな気持ちで一面に輝く天の川を眺めたのだろうか。そんな物語が浮かんでくるような一句。いま彼女はとうとうしているのか、気になって仕方ない。

寺尾 令子

到来の貝が砂はく良夜かな

谷村 鯛夢

あたかも今宵は中秋の名月、海辺の近くより送られて来た貝にも、その美しい月光を浴びさせれば自然と砂を吐いてくれると厨の窓辺に設え眠る作者―。一行の詩に小さな物語を感じ、わくわくしました。

玉木 祐

持時間なき夕焼に見つめらる

安西 篤

夕焼けの持ち時間に見つめられている作者。見られていて自分の生きる持ち時間を考えて居ると読んだ。子供の頃は遊びに夢中でも家に帰る時間だった。一日の終る時間、年齢により夕暮れ夕焼けの受け止め方は変化すると思う。必ず来る時間を実感。

田山 光起

オデーサを発つ貨物船古小麦

岡崎たかね

たとえ「古小麦」でもオデーサ港から輸出される農産物は、ウクライナ侵攻の中で殆ど唯一の救いだった。それさえも、ブーチン政権によって封じ込められてしまった。映画「戦艦ポチョムキン」のオデーサの虐殺シーンと重なり合い、ひどく虚しい。

中條 啓子

昨日より登ったような蝉の殻

拔山 裕子

一読で明解。面白い。木に登る途中で本体は無事に羽化し、幹にしがみついている蝉の殻が、昨日より上に登ったように感じている。着眼点がユニーク。シエールでユーマオもある。蝉の殻が、健気かわいらしく思えてくる。

中田とも子

ひもじさの歴史を綴る芋の蔓

永井 潮

終戦の翌年、沈没直前のオンボロ輸送船で中国から引き上げる時、連日、微塵切りにした芋の蔓を重湯の様にした汁物が三度の食事でした。当然、何度も死者を海面に降ろす光景―。未だに海に行くと、思い出す切ない事象です。戦争さえなければ！

中野 淑子

太陽の運行通りに生き晚秋

岡本 久一

季節の秋に人生の晩秋を重ねて詠まれたもので、飾らないストレートな詠い振りが読者の心を捉えた。「太陽の運行通りに」とは言い得ており、納得させられる共鳴の一句でした。

長野 保代

ひもしさの歴史を綴る芋の蔓

永井 潮

飽食の時代の今、上五から中七は私の胸に忘れられぬ学童疎開の辛い思い出。都内より立山連峰の麓の古寺へ。食べ物が無い。賄いのオババが煮て呉れた芋穀は井一杯あった。空腹は満たされ美味しかった。今でも私はよく煮る。好物の一つになっている。

成戸 寿彦

歩かねば脚は廃用夏落葉

荒川勢津子

廃用症候群という言葉があるというが、筋肉を使わないと筋肉ばかりか内臓まで衰えるという。新芽が出て間もなくすると、古い葉からひそかに落葉する夏落葉にならないために、「歩かねば!」実に身につまされる句。

西村 智治

木犀や鏡濡らしてから拭う

中矢 温

木犀も鏡も、それぞれは、使いつくされた感があるが、二つが組み合わさって、不可思議な世界が現出した。二つの事物をむりやり関連させようとせず、そのまま併記しただけだったのが、よかったのかもしれない。佳句と思う。

野口 佐穂

草々と書き秋風を同封する

前田 弘

心を通わせる手紙に秋風を同封する。というのがとてもいい。手紙の内容も爽やかなものに違いない。書き終えて封をする光景が目に見えるようだ。「草々」も動かない。いまはメール中心の時代だが、文字一つに表情のある手紙も捨てがたい。

連見 徳郎

昨日より登ったような蝉の殻

抜山 裕子

蝉の殻もよく見れば、生きるぞという意思を表している。廃棄物のように魂の抜け残滓ではない。もう少し生かしてやりたかった、そんな気持ちで昨日より一歩二歩高く上ったように見えたのでしょう。命の高さを思う気持ち。善人の資質です。

平山 道子

草虱おろかで一所懸命で

好井 由江

秋の野原や山道を歩いていると、衣服に麦粒ぐらいの草の実がくっつくことがよくある。「おろかで一所懸命で」の表現により、自然界の小さきものへ寄せる眼差しの優しさが伝わってくる。「草虱」に仮託する作者の深い思いに共感しました。

藤原はる美

こんなにも生きてしまったひぐらしよ

冬木 喬

晩年とはかくも長いものか、と誰かが読んでいたが、私自身想像もしていなかった八十年代それも半ばに突入してしまった。ショーウィンドウに映った自分のしょぼい年寄姿に啞然とするも、心のどこかに老いを確と認めたくない気持ちもある。

冬木 喬

もういいかもっと生きるか半夏生

三浦 土火

人生百年と言われても、それ相応の歳を重ねると、こんなにも生きてしまったと、時折思うことがある。

終息の見えないコロナに、混沌とした世情。「もういいかもっと生きるか」の自問自答に共感。

三池しみず

藻刈舟池に青空戻したり

根岸 敏三

夏になり池には藻が繁茂します。そこで藻刈舟が池の藻を棹でからめとったり、柄の長い鎌で刈り取ったりします。作者はその作業が終わった池の水面に青空が映りこんでいるのを見て感動しています。美しい句で人の心をうるおしてくれそうです。

水落 清子

変りゆく心のかたち秋の雲

松元 峯子

ご自身の心の変化に気づいたか、冷静に自分を見詰める心に惹かれます。西からゆるやかに流れ来る雲あり、北から急ぐ雲もあって秋の雲は郷愁を誘います。変化する心と流れゆく雲との対比で美しくも少し切ない一句となりました。

武藤 幹

線香に火のつきにくい戻り梅雨

三浦 禎三

私も七十半ばとなり、どれだけ慕参を重ねて来たことか。この句には際立つた意外性も象徴性も、時事性も無い。慕参の折りのよく起こる事柄、多少の苛つきを詠じただけとも言える。だが、その全てが、圧倒的な実感として、私の心を占拠する。

村井 一枝

麦秋やマトリヨシカの瞳に憂い

岡崎 万寿

ロシアの理不尽な戦で日々多くの命が失われている。日本で活動するロシア人女性が、恥ずかしい申し訳ない早く戦を止めてとテレビで泣き詫びている姿に涙が。よくかく一日も早く止めてと思う。マトリヨシカの憂いがさらに深くならないように。

守谷 茂泰

花木権朝から時間やわらかい

山崎せつ子

庭木に多く植えられる木権は、色鮮やかなものもあるが、親しみやすい印象の花である。「朝から時間やわらかい」という表現から、ただ単に優しい時間というだけでなく、時間に匂いや体温の温もろろが感じられて、くつろいだ空気感が伝わってくる。

吉平たもつ

本質はどこに玉葱むいてをり

根岸 操

ロシアがウクライナに侵略を開始してから一年が経とうとして。プーチン大統領は何を思い、何を考へての戦争なのかテレビの映像を見てもわからない。作者は玉葱をむきながら本質を突き止めようとしたのだろうか。ああ涙が止まらない。

依田しず子

魔女だった頃は黒髪天の川

佐藤 茉

ゆえあって今は魔女を引退されたらしい作者。魔法薬を作るための大釜も封印して悠々自適な日を送っている。かつて杖の先から生み出した天の川を見上げながら、今でも少し伸ばしている爪の手入れに余念がない。楽しい想像をさせていただいた。

## あけぼの便り

○安西篤様、高野公一様、永井潮様、前号において、前々号の「無季俳句考」についての諸兄からの御感想、御指摘、有り難く拝読致しました。拙文に向き合って戴けた事、感謝しております。大変励みになります。有難う御座いました。

(市川春蘭)

○郷里が私と同じで隣の市に住んでいる友人から今年も洪柿をいただきました。甲州百匁という種類で二十個程を干し柿にし、毎日それを見て甘くなる日 wait しているこの頃です。(一ノ瀬順子)

○足腰の状態が思わしくなく、まだ杖から離れられません。一人で歩けず、それなりの友人たちと楽しく過ごしています。

(大友恭子)

○マスク生活も三年目に入ると外す日が来るのがコワイ。かつてマスクを仮面のようにかけて生活していた人達がいた。そして流れる「予防にマスク」。喉を守って就寝マスクしています。(小川葉子)

○俳句表現では夫と書いてほとんどの人は「つま」と読んでくれる。永遠もリズム

がよければ「とわ」と読まれる。伝統の良さとと言えるでしょう。伝統とタブーを作らない自由が私の課題です。

(川島一夫)

○句集「焉」を出して疲れた。テーマを鮮明にしてラスト句集の自覚を。故に反応も多様ですさまじく、対応に疲れた。が、気分はずつといい。(川名つぎお)

○先日、風邪がみでちよつと熱が出ただけでコロナの検査となりました。なんか罪人扱い！(幸村睦子)

○コロナ、インフルエンザと次々に流行して生きていくのも大変な世の中をかいぐりながら年を重ねています。俳句をただ一つ頼みとしてもう少しがんばれるかな。(佐々木克子)

○東の小京都、足利に博物館を造るべく活動しています。(清水弘一)

○初めて投句いたします。どうぞよろしくお願いたします。(高瀬多佳子)

○会話の中で若い人の声がだんだん聞こえ難くなり、とくにマスクをかけたくぐもった声聞きづらく苦手。補聴器を使うようになりました。(玉木 祐)

○この処体調がすぐれず週二回デイサービスに通っています。先日は多摩の俳句大会で十三位の賞をいただきましたうれしかったです。

です。ありがとうございました。前を向いて前進あるのみと確信しました。天国へ旅立つ友人も増え淋しいかぎりですが、きつとあちらでも楽しい句会がひらかれていることでしょう。でももう少し待っていてネ、と合掌しています。

(寺尾令子)

○いつもお世話になり有難うございます。足腰が思うようにならずなかなか出かけられません。よい季節なのに残念です。皆様の俳句に励まされております。

(飛永百合子)

○コロナ禍で各種の行事が影響を受けています。このような時期に踰根泉園、郷土の森博物館で吟行会が行われ、お陰様で実りの多い楽しい吟行会を経験することができ、心機一転みなさまから元氣とやる気をいただきました。吟行の企画運営に当たられた係の皆様感謝、ありがとうございます。ございました。(長澤義雄)

○これから極寒をむかえるウクライナ、想像するだけでも恐ろしくなります。人間って：悲しい生き物でもありますね！

(中田とも子)

○今年の夏は何かと多忙で、俳句大会への出句の機会を逃してしまいました。来年はしっかりと応募しようと思います。

(成戸寿彦)

○今年もコロナ、インフルエンザそしてウクライナの戦争と大変な事が続くのでしょうか。一日も早く平穏な日々になるようにと祈るばかりです。(西前千恵)

○散歩途中の小川に白鷺がいます。ゆつくと歩いて素早く小魚をとらえ食べています。いいものですね。(根岸敏三)

○第四十回多摩地区俳句大会の通常開催は三年ぶりでした。ようやくコロナから抜け出せた感じ。俳句を作ることに追われるのではなく、鑑賞、感じる心を持つことが大切なのだと言師の先生の話を聞いて思いました。(根岸操)

○最近、スマホとパソコンを更新しました。両方とも数年の間に能力不足となり、動きが悪くなっていました。世の中の変化の速さを感じています。俳句づくりも時代に対応していかなければと思っているのですが…。(野口佐穂)

○門野ミキ子様、前号で拙句をご鑑賞いただきまして有難うございました。このごろは相棒もシルバークートから杖に変わりました。(平山道子)

○巻頭の俳句論考はみな名文だが、高説は時に難解だ。吾人、定式に拘泥し駄句の山を積む浅学なれば、例えば、10字に

満たぬ散文節を俳句として受容しかねる。山本健吉氏が新興・新傾向俳句を、軽佻、鶴的（『石田波郷君の応召を送る文』）と唾棄したが、我与せぬも、今時桑原氏の如き、寸鉄刺す、を耳にせず。

（淵田芥門）

○前田光枝様、前号では拙句をお取り上げ下さり有難うございました。母は心の泉です。今後の作句の励みとして続けたと思います。

（堀部節子）

○いつもありがとうございます。今年もあと一カ月となりました。コロナも収束どころかまだまだ。予防しか出来ないけれど、気を付けましょう。

（前田光枝）

○神崎幸子様、宮腰秀子様、前号で拙句にご鑑賞を頂き誠に感謝申し上げます。句は自分の手から離れましたら、皆様の感性で読み方は自由です。沢山学ばせて下さいましてありがとうございます。又コロナの感染者が増えています。御自愛のほど切にお願い致します。（松本まり）

（満田光生）

○コロナ禍パンデミックが報じられてもすぐ丸三年となる。私の友人、知人、親

戚…、この三年に九人の方が亡くなった。一人として直接コロナの為ではなかったが、遠因として明らかにコロナの影響があった。今、コロナ第八波の最中！皆様くれぐれも油断なく。「ご自愛専一」にお願い致します。（武藤幹）

○コロナの終息もなきまま今年も終わろうとしていきます。皆様様のご健康をお祈り申し上げます。（山崎美紗緒）

○いつもお世話になります。この時期一年の進み方が年の後半になるに従い加速度的に速く進んでいく気持になります。気忙しさから時々離れて散歩道の木々の紅葉に目を休ませたり、音楽を聴きながらゆっくりお茶を飲む日々の時間が何よりリフレッシュ効果大だなあと感じます。これから冬に向かいますが、どうぞあたたくお過ごし下さいませ。（吉川真美）

（吉澤利枝）

○俳句大会での今野寿美先生のご講演、興味深かったです。ご自身作ることはないが、ずっと身近にあって読まれていた、そしてご自身の短歌に想を得たこともあると言われたのに感心しました。ご準備、当日とありがとうございます。（依田しず子）

○いつも「多摩のあけぼの」を読み勉強させていただいています。これからもよろしくお願いします。（米倉信山）

○関梓さん、前号で拙句「夕端居…」を取り上げていただきありがとうございます。幾つになっても励みになります。（渡部洋二）

○前会長の故柏田浪雅さんの新墓への納骨が済み、十一月十一日稲吉豊さんと二人でお参りしてきました。墓碑に一行「ありがとう」と孫娘さんの字で記されていたのが、印象的でした。昨年研究会の際に有志の皆さんから頂いて奥様にお届けした追悼句です。（三浦土火）

柏田さん、追悼句（令和三年十二月）

天狼や気づけば全て包まれて 石橋いろり  
好漢のあのシャンソン残る菊 戸川 晟  
禪のこと思い出ひとつ冬に入る 根岸 敏三  
冬浪やマイウエイの歌漂へり 根岸 操  
予祝せむ汝と父との春の膳 水野 星閣  
冬日燦々歩幅大きく逝かれけり 秋山ふみ子  
シャンソンの終曲を聴き山眠る 永井 潮  
一つの死かくも濃くあり冬銀河 飛永百合子  
くちなはを追うて野駈けの大男 稲吉 豊  
惜別の想いあらたや冬日落つ 白尾 幸子  
追悼の一句に酌めり爛熟く 三浦 土火

（順不同）

# 秋の吟行会 府中市郷土の森博物館

令和四年十月一日

爽籟とはこういう風の事を言うのだろうか。

まさに秋晴れの吟行日和。緑豊かな森の散策を楽しむことができた。郷土の森は多摩川の北側の崖（はけ）の勾配を利用して、此処彼処に清らかな水路がめぐらされている。

一步園に踏み入れた時から、金木犀の香に蹂躪された。曼珠沙華の盛りはすでに終わっていたが、そこを舞う無数の黄蝶や蜻蛉が目を引く。敷地が広く、全て見て回るのは骨が折れる。喧騒から外れた園内には、穏やかな時間が流れていた。

プラネタリウムや展示室を擁する本館から櫓並木をゆくと、明治の村役場、郵便局、学校などが復元されており、一挙にその時代にワーブしたかのようだった。旧民家の美蔵のカフェや土日限りの拉麵屋、出店の団子屋などを利用した人も多かつたようだ。二十七人の参加者の中で初めての方六人を迎えることができ、句会に新風が吹きこまれたことは間違いない。

（石橋いろり記）

## 〈入賞十句〉

我もまたオブジェの一つ秋の園  
秋深し明治のポストに手を入れる  
蜻蛉はひかりとなりぬ崖の上  
段丘の日をこぼしつゝ水澄めり  
店蔵の間口は五間昼ちちろ  
空つぼの心になれば秋が見える  
穴惑い府中の森が空いてるよ  
天高し森のあるじのごと櫓  
水澄むや明治の看板太き文字  
秋麗の鳥田菓舗の葉瓶

秋山ふみ子  
森本由美子  
高野 公一  
永井 潮  
稲吉 豊  
松元 峯子  
石原 俊彦  
有坂 花野  
押見 淑子  
依田しず子

## 〈一人一句〉

どんぐり探す失った時探す  
いきなりの匂ひの濃さや金木犀  
しもばら草右から書かれる猫イラス  
抽斗たくさん何でも効く菓舗かな  
木漏れ日に秋を拾いで漫ろかな  
防人の妻湿らせよ萩の花  
足もとに秋蝶の来てものがたり  
かなたには十月桜水の音  
ありたけの秋の日あびて芝広場  
秋風に赤駒の歌反芻す  
黒髪に触れて音無くこぼれ萩  
ほどほどの萩のトンネルまあいいか

中山 禺海  
尾崎 太郎  
多田 文代  
根岸 操  
笹木 弘  
戸川 晟  
泉 信也  
山崎せつ子  
長澤 義雄  
亀津ひのとり  
南行ひかる  
野口 佐稔

秋深む裸電球 旧農家 根岸 敏三  
繁る葉に隠るる銀杏熟し初む 山本ひまわり  
十月桜組曲のごと風往なす 石橋いろり  
無辺より透き通る青や曼殊沙華 関 梓  
園庭の古木のまわり曼殊沙華 西前 千恵





高野 公一さん



森本由美子さん



秋山ふみ子さん

吟行会入賞者（一位から三位）



郷士の森吟行会

# 第40回東京多摩地区俳句大会

武蔵野の紅葉も色づき始めた11月5日（土）、武蔵野スイングホールにて、二年間コロナで対面での会が流れていた俳句大会を開催しました。53名の参加を得て、会歌「多摩のあけぼの」を作詞の沢田改司さん、作曲の宮川としをさんを偲びつつ斉唱。来賓の山本敏彦東京都協会長、徳吉洋二郎千葉県協副会長、芳賀陽子神奈川県協事務局長より40周年を迎えたことの祝辞を頂戴しました。

著名な歌人であり宮中歌会始の選者である今野寿美先生により「近くて遠う俳句と短歌」と題してご講演をいただきました。お若い頃に感銘を受けられた俳句と短歌を一对にして、打楽器的な俳句、弦楽器的な短歌という宇多喜代子さんのコメントを引用しつつ、その一つ一つの魅力を熱くお話しいただき、最後の質疑応答コーナーでは多くの質問にお答えいただきました。

休憩をはさみ、576句の作品集が配られ、互選による入選30句と特別選者による特選賞の表彰式が行われました。投句者には若い中学生もおり、期待をこめて特別奨励賞を急遽設けました。ただ申

し訳ないことに、句会運営側のミスで、時間配分をコロナ前の進行のつもりで設定してしまい、大幅に時間が押ししてしまいました。今野先生の講評のみとなつてしまい、来賓や参与の方々からの講評を戴くチャンスを逸してしまったことは残

念でありません。運営側として汗顔の至りです。この場で関係各位に深くお詫びし、今後の課題として、プラスに生かしていきたいと思っております。

（石橋いろり）



今野寿美先生



吉村会長



前列左から講師今野先生、吉村会長、後列左から千葉、都区、神奈川来賓



下田峰雄さん



川崎果連さん



永井潮さんと吉村会長

## 第40回 俳句大会 入賞作品

### 〈大会賞〉

花火終え夜空を星に返しけり

永井 潮

### 〈上位入賞句〉

父の世は父が持ち去り敗戦忌 下田峰雄  
 ドクターの椅子半回転「風邪です」 川崎果連  
 満月やどのわたくしを連れ出すか 山本敏倅  
 男郎花つまらなそうに群れている 高野公一  
 江の島は海の音から秋になる 石原俊彦  
 お月様地球は青きままですか 関戸信治  
 児の笑顔もう向日葵になつて 飛永百合子  
 焼きいも屋ほかほか声を置いてゆく 吉村春風子  
 せっかちな母の動線夏座敷 鈴木砂紅

### 〈大会選者の特選句〉

今野 寿美 選  
 ぶーちんの眉間に誤植底雪崩 並木邑人  
 山本 敏倅 選  
 空蟬と捻子が一本落ちてゐる 田口 武

徳吉洋二郎 選

お月様地球は青きままですか 関戸信治

芳賀 陽子 選

夏座敷床に野の風活けてある 田畑ヒロ子

安西 篤 選

勤勞感謝の日ネクタイが長すぎる 徳吉洋二郎

前田 弘 選

私が二人いる日や終戦忌 永井 潮

遠山 陽子 選

大家族だったこの家残る虫 尾崎 竹詩

冬木 喬 選

炎昼や男勝りという歩調 飛永百合子

三池 泉 選

老翁に口笛返す少女かな 岩下三香子

三浦 土火 選

秋天へ届け供養の護摩太鼓 坂間賀世子

江中 真弓 選

リング剥くただそれだけの平和かな 田邊 彬

高野 公一 選

空蟬と捻子が一本落ちてゐる 田口 武

吉村春風子 選

菖蒲園いつしか傘が杖となり 根岸 操

根岸 敏三 選

花火師の人生咲かず夜空かな 永井 潮

永井 潮 選

モノリザの田んぼアートや稲の秋 尾関 英正

山崎せつ子 選

露草や洗いざらしの朝が来る 島 彩可

戸川 晟 選

青葡萄群れる頃にはママになる 加藤 祐子

小山 健介 選

露草や洗いざらしの朝が来る 島 彩可

根岸 操 選

行く秋や多摩に檜皮の匂濃く 三浦 土火

蓮見 徳郎 選

柿挽ぎて空に余白の生れたる 吉村春風子

水野星閣 選

金木屋祖母の文箱に金釘 石橋いろり

佐々木克子 選

山の声水のごゑ聴くもみぢ狩り 水野 星閣

石橋いろり 選

花火終え夜空を星に返しけり 永井 潮

大森 敦夫 選

行く秋や多摩に檜皮の匂濃く 三浦 土火

〈特別奨励賞〉

福引の五等のバスボム月涼し 西野 奏子

今回、中学二年生の西野奏子さんが応募されたことを受けて、若い方に伸びて

いってほしいという願望を込めて急遽設

けました。若い裾野を広げる起爆剤になればとの願いをこめての事です。『現代俳句』十一月号の翌檜篇の青年部に「相互フォロー」というタイトルで、西野奏子さんのみずみずしい感性の八句が掲載されていきました。

校章の針胸に刺し卒業す

ティーバッグの紐染まりゆく春の月

小学校六年の夏に俳句を始め、好きな季語は良夜とのこと、今後の西野奏子さんの俳句活動を多摩地区で温かく見守っていただけらと思います。(石橋いろり)

第9回 俳句研究会

9月24日(土)立川市子ども未来センター 担当幹事 根岸敏三・秋山ふみ子・

玉木康博・石橋いろり・

満田光生・大森敦夫・

石原俊彦・関 梓

参加者34名

★講話……戸川 晟氏「禪と俳句」

二人なら一駅歩く月の夜 関 梓

梓

空中を泳ぎたくなる良夜かな 越前 春生

彼岸花いのちの丈を並べをり 秋山ふみ子

満月や地の一点にひとりなり 根岸 操

秋暑し寿命近づくフライパン 永井 潮

花芙蓉朝から時間やわらかい 山崎せつ子

じゃあねと別れて五年秋彼岸 戸川 晟

大和路を色なき風と道連れに 石原 俊彦

野に立てば吾も穂先や蜻蛉来る 高野 公一

草の花線路に耳をあて昭和 前田 弘

晩節の日日しなやかに竹の春 森山洋之助

橋の上歩くと止まる罌雲 前田 光枝

田園交響曲の秋よ草食系男女 満田 光生

苦瓜の熟れて終の住処かな 三浦 土火

石榴裂け空家の庭の鳥の群 山本ひまわり

湧き出でて忽と消えたり稲雀 長澤 義雄

立ち止り名を思ひ出す秋夕焼 水落 清子

踏み切れぬ結婚離婚おけら鳴く 南行ひかる

十三夜影絵の狐こんと啼き 稲吉 豊

一心と無心は似たり秋思ふと 吉村春風子

出沒!!!の標識ばかり笹竜胆 石橋いろり

籬 荒レ草穂垂レ月唯ダ一片 淵田 芥門

集う度遣りし者の秋思かな 飯田 玉記

青空へ赤鶏頭が反り返る 寺田 昭彦

水澄むや汚れの透けし己が影 森山洋之助

野分去る登遠き未明かな 大森 敦夫

ゴタール逝く深夜映画のフィルム切れ 亀津ひのとり

三人居り四人集へば祭酒 水野 星閣

主なき庭に今年も彼岸花 大久保 謙  
台風の到来近かし句会で 武田 和明  
高階から新宿の街秋の雨 西前 千恵  
満月を後飾りより観る亡父 玉木 康博  
蠟螂の鋭き目付き我になし 根岸 敏三  
国葬に品格ローズマリー載せ 依田しず子

### 第10回 俳句研究会

10月15日(土) 立川市子ども未来センター  
担当幹事 戸川 晟・秋山ふみ子・  
玉木康博・満田光生・

石橋いろり・根岸敏三  
参加者27名

★講話……山本ひまわり氏

「中学校国語の俳句教育について」

柿剥いて子がいる母いる夫がいる 依田しず子  
母の喪や父に早目の秋裕 越前 春生  
生命線の上でふるへる新豆腐 永井 潮  
国境越ゆ空に棘ある母国捨て 森本由美子  
週三日シルバースで探す秋 飯田 玉記  
今日の日を誰にあげやう猫じやらし 三浦 土火  
柿たわわ空気がかたくなっている 山崎せつ子  
あてもなく彷徨ふ本屋暮の秋 秋山ふみ子  
泣いた児のこぶしが解けて櫛の実 稲吉 豊  
涙哭いて姨捨山の冬近し 淵田 芥門  
燈火親し行くこともなき島の地図 満田 光生

爽やかやハタキにリズム古書店主 野口 佐松  
余生なぞ馬に喰はせよ菊脛 亀津ひのとり  
おでん湯気刺す○△□ 櫻本 愚草  
十月や積極的に手帳買う 高瀬多佳子  
夕焼けて帰る途中の木守柿 戸川 晟  
欠け地藏赤い帽子と菊二輪 山本ひまわり  
ドローン飛ぶ秋の里山戦地にも 石橋いろり  
イヌサフラン地平に並ぶ十勝なり 玉木 康博  
秋の水大菩薩嶺のかなたより 水野 星閣  
日記帳の余白を埋めて蚯蚓鳴く 笹木 弘  
草の花雀の群れる水たまり 西前 千恵  
糶田のそろひて風に吹かれをり 根岸 操  
庭隅に咲いてさみしき花薄 長澤 義雄  
変わらずや母の実家の花八つ手 根岸 敏三  
秋涼し口を開けば饒舌に 宮腰 秀子  
贖へぬスマイル雨月セルフレジ 大森 敦夫

### 第11回 俳句研究会

11月26日(土) 立川市子ども未来センター  
担当幹事 満田光生・秋山ふみ子・  
玉木康博・水野星閣・稲吉豊・

石橋いろり・根岸操・大森敦夫  
参加者29名

★講話……小山健介氏

「『百騎の絵馬』を開いて」

十一月日暮は和紙の匂いして 前田 弘  
裏紙に一句生まれる神無月 関 梓

熱爛で五臓六腑を診断す 石原 俊彦  
冬紅葉おなじ歩幅となる二人 秋山ふみ子  
人間に文字あることの暖かさ 依田しず子  
手の甲に菜漬手首に輪ゴムかな 大森 敦夫  
落葉焚く匂ひに昭和蘇る 越前 春生  
柗の花ほどのこと後の恋 水落 清子  
曙の三和土つめたし母子の下駄 淵田 芥門  
不審者は大方手ふら神の旅 稲吉 豊  
桐一葉ふはりと世事を忘れをり 吉村春風子  
桐一葉昭和の歌のソノシート 三浦 土火  
朴落葉ヨイショヨイショと男坂 亀津ひのとり  
ジッパを引き下ろすやう芋莖刻く 永井 潮  
綿虫の入口のなかに湧き出づる 尾崎 太郎  
来た道を振り向くように夕芒 前田 光枝  
我なりにぶれなく生きる石路の花 根岸 操  
石路の黄にころあずけている真昼 山崎せつ子  
大銀杏寄るべなきものに降り 石橋いろり  
単線の窓に近寄る冬紅葉 戸川 晟  
ラ・フランス時々こむら返りする 松元 峯子  
高原の便りに星座林檎焼く 小山 健介  
潮の音をいざようごとく石路の道 森本由美子  
日暮れまで動しむ農夫返り花 青木 隆  
老の明け暮れ久方の小春空 水野 星閣  
半月がすばつと切ったオリオン座 玉木 康博  
潤目鰯呑むブレラドンのごと降下 満田 光生  
両親に挟まれはしゃぐ七五三 根岸 敏三  
木枯やドミノ倒して年貢とり 高瀬多佳子

## 事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。(意見幹事担当)  
「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「都多摩」へと進んでください。

## ★令和五年度定時総会 並びに陽春句会

日時 令和5年3月12日(日) 午後2時  
会場 武蔵野スイングホール

JR中央線 武蔵境駅北口より徒歩2分  
(詳細は別紙をご覧ください。)

## ★初夏の吟行会

日時 令和5年5月7日(日) 午前10時  
場所 昭和記念公園花みどり文化センター

交通 JR立川駅北口より徒歩10分  
集合 総合案内所前(A1あけぼの口より)

(詳細は別紙をご覧ください。)

## ★会員の現況(12月末現在)

235名(正会員191名・一般会員44名)

☆新入会員 4名(敬称略) \*印は正会員

\*山本碩一(日野市) \*青木隆(八王子市)

尾崎太郎(川崎市) 森本由美子(東村山市)

(多摩地区に転入された方)

\*田中悦子(町田市)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(申し込み手続き不要)。それ以外の方は年会費2千円です。お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」編集担当幹事

関 梓(梓) 満田 光生(光)

飛永百合子(百) 山崎せつ子(せ)

永井 潮(潮)

## 俳句研究会

第2回 2月25日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

立川駅南口徒歩13分

(とじ込みはがきの地図参照)

電話042・529・8682

第3回 \*講話 夏目 重美氏

3月25日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

\*講話 霧野萬地郎氏

第4回 4月29日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

\*講話 吉村春風子氏

(いずれも会費五百円、出句三句)

○感染防止を心掛け、体調不良(発熱等)の場合は積極的にお休みください。お出かけ前の検温とマスクの着用をお願いします。

## 〈在宅句会〉(投句参加)

▽開催日の一週間前までに投句してください。

▽出句は一人三句です。(選句はありません)

▽20×3cm程の短冊に一句ずつ書いてください。

▽参加費は千円です。(出句時にお送りください)

▽句会終了後、全作品の得点入り清記用紙と高点句、出句された作品の成績、寸評等を取り

ポイントとしてお送りします。

ポットとしてお送りします。

(投句先) 〒180-0006

武蔵野市中町3-29-19

蓮見 徳郎方「俳句研究会」投句係宛

## 編集後記

☆コロナ禍の中「多摩のあけぼの」は休刊する事なく発行。しかし仲間と会する句会こそが俳句の愉しみ、その機会が失われない様に。(梓)  
☆母が長期の入院に。短歌が趣味で、叔父(故人)と私が歌集上梓を勧めたが固辞されてそのまま。もう遅い。句集は早く作りましょう。(光)  
☆北国生まれの私であるが、このところの東京の寒さはとりわけ身に沁みる。年のせいと言われたらそれもあるが間違いないが。(百)  
☆「あけぼの集」葉書の通信欄にねぎらいや励ましの言葉を添えて下さることが有難く、締め切りを少し過ぎてからも人力しています。(せ)  
☆将棋界の若き天才藤井聡太さんは二十歳で八タイトルの内五冠を保持、勝負の節目ごとに心情を色紙に揮毫している。当初は、初心、専心、探求、だったが竜王位を防衛した今は「雲外蒼天」「千思万考」。俳句の短縮形にも見える。(潮)

―題字は三橋敏雄氏―

令和五年一月二十七日発行

発行人 吉村春風子

編集人 永井潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒181-0015

三鷹市大沢2-1-07

大森敦夫方

TEL 090-9389-4821

FAX 04223010934

印刷所 株式会社 清水工房

TEL 04226202626